

融資先企業が不祥事を起こした時の銀行の反応とは？

銀行員が入社早々、真っ先に叩き込まれるもの一つに「融資の五原則」というものがあり、その中でも特に重視されるのが「公共性の原則」です。

犯罪行為をした企業への融資は「公共性の原則」に反することになりますので、原則として、今後二度と融資は受けられないと覚悟しなければなりません。

粉飾決算や脱税について経営者の皆さまは軽く考えがちですが、悪質なケースでは起訴されることもあり、銀行から見ればこれらは立派な犯罪行為なのです。

ただ、銀行との普通の付き合い方によっては救世主が現れることがあります。

【支店長が救世主に！？】

ある大手地方銀行の銀行員に、融資先企業で不祥事が起きた時の経験をお聞きしたことがあります。

その銀行がメインバンクとなっているある企業で、非常に悪質な粉飾決算が発覚した時のことです。

こういった時、銀行では真っ先に本部に報告がされます。支店で抱え込んでうやむやに解決するということは決してありません。

この時も報告を受けた本部では、「こんな詐欺まがいなことをやる社長からは今後一切手を引け！」「既存の融資については即回収を図れ！」という銀行としては当然の判断が下ったそうです。

銀行というのは、上意下達、上の言うことは絶対の超体育会系の組織で、「倍返しだ！」なんて上に歯向かう銀行員は現実にはまずいません。

しかし、この時、その支店の支店長が担当者に放った言葉はこうだったそうです。

「やっちゃったことは仕方がない。重要なのはいかに二度と同じ過ちを繰り返させないかだ」

「メインバンクであるウチが引いたら、いったい誰があの社長を救ってやるんだ。支店としては今後もあの社長に対する支援方針を変更するつもりはない！」

この支店長は、本部の審査部の部長はもちろん、最終的には役員まで説得に回ってくれて、この会社に融資し続けたそうです。

【大切に想ってもらえますか？】

銀行に報告しづらいネガティブなことが起きてしまった場合、隠すのは論外として、即報告に行くべきです。

皆さまの報告が遅れるほど、「ちゃんと定期訪問はしていたのか！社長との信頼関係もまともに築けないのか！」と担当者は顧客管理不足を上から詰められ、人事評価が下がるおそれがあります。

また、必ず再発防止策を持参することです。これも報告を受けた担当者は必ず上から問われることです。

皆さまの応援団になってくれるかもしれない支店の担当者が「お前はただの伝書鳩か！」などと叱責を受けないための配慮が必要です。

さらに、そもそも論として、皆さまが一番たくさん借りているからメインバンクだと思っけていても、その借入額は、その支店長から見て支店の営業成績の点から、また、支店の融資残高の点から、重要な金額でしょうか？

実は、先ほどの「メインバンクであるウチが引いたら、いったい誰があの社長を救ってやるんだ。支店としては今後もあの社長に対する支援方針を変更するつもりはない！」の言葉の後に次の本音が続きます。

「じゃないと今期の支店の融資目標、確保できないだろ。期末まであと2ヶ月しかないのに・・・。こんな金額、他に誰が借りてくれるっていうんだ」。

銀行の支店長と言えども、人の子です。融資先企業の社長は、所詮は赤の他人。やっぱり自分が大切ですし、支店の部下が大切です。他に代えがたくさんいるのであれば、不祥事を起こした社長をわざわざ助ける合理性もありません。

唯一合理性があるとすれば、自分の支店、部下の行員の評価が下がることを回避することです。自分たちに傷が付くのであれば必死になってくれるかもしれません。

皆さまが経営危機に陥られた時のメインバンクの姿勢というのは非常に非常に重要です。

銀行というのは、融資先企業の業績悪化時には「メインがなんとかしろ」となりがちです。「メイン寄せ」という言葉もあるくらいです。メインが引けばウチも引く、メインが支えるならウチも支えるで、メインが引いたのにウチが支えるという理屈は持っていないのです。